

た。パイプケースの前面に可動式のシャッターや錠戸ようどをつけ、最弱音より最強音まで音量を変化させられるようにした機構も、この頃発達したものである。マックス・レーガー、セザール・フランクなどはオルガンの有名な名手・名作曲家で、オルガン交響曲という作品群も生まれた。

今日ではロマン派時代の、外面的効果ばかりを追及する、といった極端な傾向が是正されるとともに、オルガン本来の健康な力強い荘厳な音色が見直されるようになってきている。

## ヴァイオリン

現在オーケストラなどで普通に使用されている弦楽器はヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの四種類で、それらは数多い弦楽器の中でも特に「ヴァイオリン属」として区分されている。

ヨーロッパではヴァイオリンが出現する十五世紀後半から十六世紀初頭までは「ヴィオール属」に属する弦楽器がその全盛を誇っていたが、今日これらの楽器は特別な古典楽器アンサンブルの演奏会などでしか觀賞できなくなってしまった。ヴィオール属の楽器はヴァイオリン属のものに比べて弦の数が多く、音量が小さく音域も狭い。和音の重奏には便利でも、ソロ楽器には適さないものである。

十五世紀後半ヴェニスに劇場が設立され、オペラや器楽合奏を中心とした音楽が一般大衆にとってより身近なものになった。それ以来、弦楽器も従来とは異なった要求を満たすものが求められるようになり、十六世紀にヴァイオリンが生まれた。この新しい楽器はその後約一世紀の間、それまでのヴィオール属の楽器とお互いに競争、また影響しあっていたが、結局より自由な演奏の可能なヴァイオリンが世を風靡するようになった。一方ヴァイオリンよりも低い音の出るヴィオラ、チェロ、コントラバスが、やはりヴィオール属の楽器の影響を受けながらも発展し、十七世紀初頭までにヴァイオリン属の楽器が完成した。

ヴァイオリン属の楽器の特徴の主なもの ①弦が四本で、ヴィオール属にあったような共鳴弦などを取り除き ②形態が力学的な面からも改良され、より薄い材質を用いながらより強い弦の張力（ヴァイオリンで約五十キロ、チェロで約百キロ）に耐え得るようになり ③表板、裏板とも膨らみを持ち、より広い音域での共鳴が可能で ④楽器内にある魂柱という棒で表板と裏板を連結させた事によって、胴全体がより良く共鳴し ⑤駒のカーブを急にして、演奏の際に各弦の特徴を生かせるようにした などである。

ヴァイオリンが考案された当初にイタリアのクレモナでアマティー、ガルネリ、ストラディヴァリ、ガダニーニなど、今日までその名の残る名匠によって製作された楽器は、ほぼ完璧とも言える領域まで発達した。それ以後現在に至るまでのヴァイオリン製作者の究極の望みとは「いかにこれらの銘器に近づき得るか」という事のみである。

基本的な楽器の設計や製造工程がクレモナ以来全く変わっていないとは言え、今までの長い時間の流れの中にあつて多少改良された部分も皆無ではない。演奏に使用される弦が、従来のガット弦という羊の腸から作つたものからスチール弦に移行したのもそのひとつだし、チェロのエンドピンなども好例だろう。チェロの下について楽器の支えとなつているこのピンは、十九世紀後半になつてから考案されたもので、それまではその辺の手頃な台に楽器を乗せて演奏していた。

楽器の良し悪しが設計に影響されるのはもちろんだが、それ以外にも材料となる木の質と、その上に仕上げとして塗られるワニスの質にも左右されるという。木材は良い素性のものであれば五十年、百年と時がたつてシーズニングが進み、より良い音が出るようになる。しかしその木もワニスも、以前の楽器に使用されたようなものは現在では手に入らなくなつてしまつた。ワニスの成分を化学分析して以前と全く同じ物を合成したくても、地球上どんな場所でも公害の影響のない所はない今日、昔のような不純物の混ざつていない原料は、もう決して手に入れる事ができないそうである。

それ程貴重な楽器であるからこそ、家売ってまで買う人が出てくるのだ。古い、良い楽器には美術品や骨董品に似た財産価値も生まれ、専門のコレクターも出現する。アマーティやストラディヴァリがいの「贗ヴァイオリン」を作って儲ける詐欺まがいの行為も行なわれる。ただこの贗ヴァイオリンも結構良い音がすることがあり、案外捨てたものではないという。

どこの誰による何年の作、という事を明記して楽器の中に貼られるちっぽけなラベルでさえ売買の対象になる。その昔クレモナで使用されたラベルの精巧な複製を別の楽器に貼り、少しでもその売値をつりあげようとの試みは後をたたない。楽器の真偽とその価値とを鑑定する専門家もいるが、この方面の大家の発言が市井に及ぼす影響も、金額が大きいだけにあなどり難いものである。

こうしてヴァイオリンの値段は天井知らずとなるが、ちなみに一番安いものは中国製の「ケース付き二万円」といったものであろう。上限は数年前あるオークションで競り落とされた往年の名ヴァイオリニスト、ハイフェッツの愛器ガルネリにつけられた七億円という値段あたりだろうか。しかし一億円の楽器が一千万円の楽器の十倍良い音がするか、というと、そういうものでもない所がおもしろい。

ヴァイオリンには弓がなくては片手落ちだが、これがまた何と五千円から始まって千五百万円（一本の値段）程度まであり、数百万円の弓というのはそう驚くには価しない事なのだそうである。

## ガイゲンバウアー

ムジークフェラインの一角に、世界に名を馳せるオーストリアのピアノメーカー、ベーゼンドルファー社